

世阿弥・禅竹と墨蹟

岩崎 雅彦

昨年の四月から七月にかけて、大阪と東京で《書の国宝・墨蹟展》と銘打った展覧会が開かれた(大阪市立美術館・五島美術館)。この展覧会は、墨蹟の名品百九十五点を集めたもので、これまでにこれほど大規模な墨蹟の展覧会が企画されたことはなかった。室町時代の文化に何がしかの関心を持つ者にとつては、見逃すべからざる展覧会であり、もちろん能の研究者にとつても必見のものであった。私も遠路を厭わず、展示替えを含め、大阪会場に二回、東京会場に二回足を運んだ。国宝十五点、重要文化財百二十点(大阪会場)を含む優品が一堂に会して並ぶさまは、まさに圧巻であった。

墨蹟とは禅宗の高僧による書のこと、禅の思想や境地を独特の書風で書き記したものである。それらの筆跡からは、技術的な巧拙を越えて禅僧たちの人間性がじかに伝わってくる。これらの墨蹟は、師資相承を証明するものとして、また過去の先師たちの教えに直接触れるための貴重な品として、禅宗諸寺院

で大切に伝えられてきた。また茶の湯が盛んになってくると、茶掛としても珍重されるようになる。

以前、世阿弥や禅竹の能楽論に見える記述と墨蹟の関係について述べたことがある(「無所住と寿福増長―『花伝』語彙考証、二題―」『鉄仙』五三四号。平成17・5)。その要点を記すと次の通りである。

世阿弥は『花伝』第七「別紙口伝冒頭に、四季の花が咲いては散る珍しさを述べた後に、能も住する所なきを、先づ、花と知るべし。住せずして余の風体に移れば、珍しきなり。

と記し、能の芸に変化を持たせる必要性を説いている。「住する所なきを」という表現は『金剛経』の「応無所住而生其心」(応に住する所無くして而もその心を生ずべし)という文句に基づき(能勢朝次氏による)、中国禅宗第六祖の慧能の言行録である『六祖壇経』にもこの句が引かれる(黒田正男氏による)。慧能が『金剛経』のこの句を聞いて大悟したことか

ら、この言葉は禅宗では重要なものとされている。また金春禅竹の『五音三曲集』にもこの言葉が引用されている。京都相国寺にはこの句を記した春屋妙葩(二二二一〜八八)の一行書の掛軸が現存する。妙葩は足利義満の受戒の導師を勤め、相国寺の開山に迎えられた人物である。世阿弥がこの掛軸を見ていた可能性もあり、この句は当時広く知られていたようである。

同稿では、世阿弥の使用した語句の研究に際して、墨蹟の類にも注意を払う必要があることを指摘した。今回の展覧会にあたり、「無所住而生其心」の一行書が他にも多数存在することが確認できたので、これを報告したい。

前述の《墨蹟展》には図録と、それとは別に、書籍・売立目録で確認できる墨蹟作品を一覧表にした『墨蹟資料集』があり、大変に役に立つ。それによると、まず無準師範(一一七八〜一二四九)の作例がある(大正七年売立目録)。無準師範は中国四川省の人で、径山万寿寺の第三十四代住持を勤めた。来日して鎌倉円覚寺開山となった無学祖元や、日本から入宋して印可を受け、京都東福寺の開山となった円爾弁円(聖一國師)は、その弟子に当た

る。次に一山一寧(一二四七〜一三二七)の作例。これは同展に出品された(個人蔵。図録番号一九二)。一山一寧は中国浙江省の人で、元の成宗の命により来日、北条高時に帰依を

受け、建長寺・円覚寺の住持となった。のち後宇多天皇の招請により南禅寺の住持を勤める。書画に巧みで、広い教養を持ち、日本の五山文学に大きな影響を与えた。弟子には夢窓疎石・虎関師錬らがいる。なお一山一寧には、当該作品とは別にもう一点、徳川美術館にも作例がある。

夢窓疎石(一二七五〜一三五二)にも、相国寺と鹿苑寺にそれぞれ「応無所住」「而生其心」の双幅があり、これとは別に「而生其心」の一行書がある(『茶の美 茶掛展』新潟美術館。昭和56)。夢窓疎石は伊勢の人。後醍醐天皇・足利尊氏らの帰依を受け、また足利直義の質問に答へ『夢中間答集』を著した。天龍寺・西芳寺等の作庭でも名高い。春屋妙葩は甥に当たる。なお、時代は下るが、一休宗純(一三九四〜一四八二)もこの句の二行書を書いている(畠山記念館蔵)。

「応無所住而生其心」の句は、多くの禅僧たちによって掛軸に書かれており、著名なものであったことがわかる。この句は墨蹟の中によく見かけるもので、茶人によって愛玩され、茶席で人気が高い一幅であるという(同展図録。名児耶明氏執筆)。『茶席の禅語句集』(淡交社)にもこの句が立項されており、美術史や茶道の方面では、よく知られたものであった。

室町幕府・將軍と関係の深い禅僧たちの掛軸が、相国寺・鹿苑寺等に伝わっていること

からして、そのような文化的環境の中で、世阿弥も自然とこの言葉に親しむようになったことが想像される。

こうした墨蹟とはまた別に、この句は大衆の面前で禅僧によって説かれることもあった。大見禅龍(一二三九〜一四五六)や金岡用兼(二四三八〜一五一五)の語録に、この句についての詳しい解説が記されているのはそのことを伝えている。また時代は近世初期に下るが、この句が参禅の課題として用いられたことを示す資料も多く存在する(安藤嘉則氏「中世禅宗における『応無所住而生其心』の拈提」『中世禅宗文献の研究』平成12)。

禅竹がこの句についての知識をどこから得たかは不明ながら(高橋悠介氏「禅竹能楽論における『露』の一側面」『能と狂言』5号。平成19・5)、当時この句がはなはだ著名なものであったことからすれば、それを知る機会は多く存在したものと思われる。

※

世阿弥は『至花道』で、芸を極めた上手が、時々異風を交えて演じることによって、観客に珍しさを与えることを述べている。そして「上手の闢けてなす所を初心の似するは、非を戒めている。続いて『孟子』の「縁木而求魚」のたとえを引いて、「木に縁りて魚を求むるは、愚かなるまで也。失は無し」と説く。そして

本風の内の上曲ならば、似するとも、叶はぬまでにて、さのみの失はあるべからず。これは木に縁りて魚を求むる分際也。

とし、初心の役者が、正當な演じ方ではあるが、出来もしない高度な技をまねることを、木に登って魚を求め愚かさにとえている。

義堂周信(一二二五〜一三八八)の墨蹟『少室説』(図録番号八五)は、至徳三年(一二八六)、義堂が南禅寺在任中に、山中で修行していた嵩九知客に乞われて書き与えた文である。この中で義堂は、面壁九年を指す嵩九に対し、達磨の心に至るべきであると説く。そしてこの文中に「縁木求魚の語が使われている。世阿弥が引用した『孟子』のこの言葉は、禅の世界で愚かな行動を示すたとえとして、それより先に使われていた。ちなみに至徳三年に世阿弥は二十四歳であった。

義堂周信は土佐の人。夢窓疎石に師事、円覚寺などに住し、のち足利義満に呼ばれて京都に戻り、南禅寺などの住持を勤めた。義満の政務に参与し、絶海中津とともに五山文学の双壁とされる。

世阿弥が伝書に引用する中国の古典の語句も、すでに五山を中心とする禅の文化圏の中で使われていた可能性は低くないだろう。世阿弥が中国の古典から独自に引用したと考えるよりは、將軍とそれを取り巻く禅僧たちの文化から受けた影響を考える方が実態に近いと言えるだろう。(國學院大學非常勤講師)